

奈良県香芝市

し も だ ひ が し い せ き

# 下田東遺跡

五位堂駅前北第二土地区画整理事業に伴う  
平成13・14年度発掘調査の成果



① 復元された馬形埴輪と家形埴輪（屋根の一部）

香芝市都市整備部区画整理課  
香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館

# はじめに

下田東遺跡は、香芝市の南東部、下田東3丁目・狐井一帯に広がる縄文時代から中世にかけての複合遺跡です。場所は、馬見丘陵の南西端、葛下川沿いの平地に位置しています。この遺跡では、市施行による「五位堂駅前北第二土地区画整理事業」という町並みづくりが行われるため、ここで発掘調査することになりました。

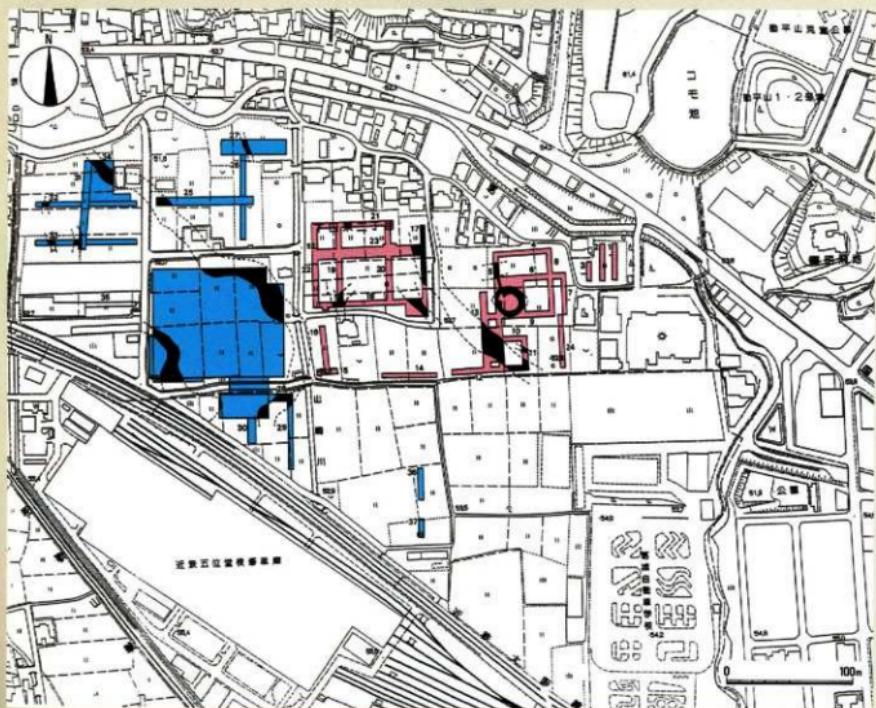
## 第1次調査(平成13年度)おもな調査のようす

**遺構** 帆立貝型前方後円墳(下田東古墳)、旧河道(川跡)、堰を設けた水路、大溝、掘立柱建物

跡、井戸、土坑(土器などを捨てたり、納めたりした穴)、素掘小溝(耕作に伴う溝)などがみつかりました。

**遺物** 縄文土器、石器、円筒埴輪、形象埴輪、須恵器、土師器、軒瓦、鷲尾(屋根飾り)、壇(レンガ)、

馬鍔、円面鏡(すずり)、転用硯、墨書・墨画土器、斎串(おまつりに使われた木製の串)、乾元  
大宝(958年に日本で造られた貨銭)などが出土しました。



下田東遺跡の位置 (S=1/4000)

■…第1次調査(平成13年度) ■…第2次調査(平成14年度) ■…旧河道、溝、古墳周濠 数字…トレンチ(調査区)番号



② 下田東古墳全景（右が北）

全長約21mの前方後円墳（鍵穴形の古墳）です。この古墳は前方部（四角い部分）の長さが後円部（丸い部分）の直径より短く、見た目が帆立貝に似ているため、特に帆立貝型前方後円墳と呼んでいます。まわりにめぐらされたばかり（周濠：幅3.5~5m、深さ0.6~0.8m）からは、多数の埴輪が出土しました。ほとんどが土管状の円筒埴輪ですが、馬・人物・鶏・家などをかたどった形象埴輪もあり、これらは香芝市では初めての出土です。古墳は開墾の際に壊されました。埴輪はもともと古墳上にたてならべられていたものでした。死者を葬る墓室（埋葬施設）もありませんでした。古墳時代後期のこの古墳は一緒に出土した須恵器の形から、5世紀末に築かれて、6世紀後半まで死者を弔うまつりが行われていたと考えられます。



③ 馬形埴輪の出土のようす



④ 人物埴輪の出土のようす



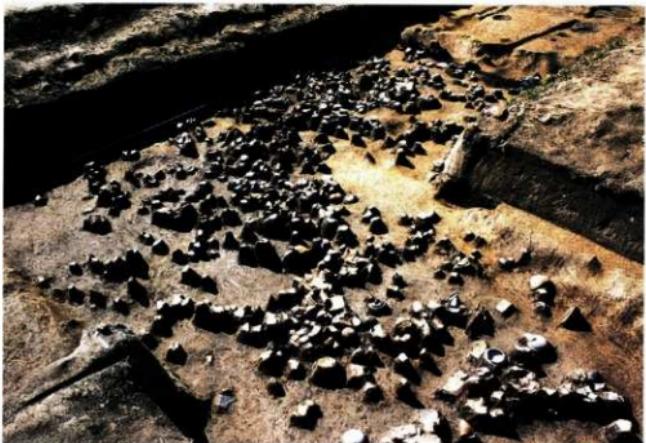
古墳時代～平安時代の川跡です。幅は約15m、深さは約1.8mあります。南東から北西方向へ水が流れていました。川砂の中からは、軒瓦(軒丸瓦、軒平瓦)、鶴尾、埠、凝灰岩切石、墨書・墨画土器、斎串、乾元大宝などが出土しました。

⑤ 下田東古墳の南側の旧河道（北から）



⑥ 18トレンチ東南側の水路に設けられた堰と凝灰岩切石（南東から）

幅5～10m、深さ1.3～2.6mをはかる、飛鳥～奈良時代の水路には堰が設けられていました。堰は水路の流入口・出口に設けられる施設で、水の出し入れする量を調節するためのものです。この水路では、馬鍬、円面硯、転用硯、瓦、凝灰岩切石などのほか、馬の歯が出土しました。



⑦ 19 ドレンチ南端の大溝出土の土器群（北東から）

幅8~9m、深さ0.3~0.45mをはかる、古墳時代後期（5世紀末~6世紀前半）の大溝です。下田東古墳とほぼ同時期の須恵器や土師器が大量に出土しました。また、大溝の周辺には掘立柱の柱穴が多数分布しており、この時期から平安時代までの時代ごとの集落が存在していたようです。



⑧ 複弁八弁蓮華文軒丸瓦・四重弧紋軒平瓦・鷲尾（左から）

下田東古墳の南側の旧河道から出土した軒丸・軒平瓦は、7世紀後半に建てられた川原寺（奈良県明日香村）から出土したものに似ています。また、鷲尾は金堂の屋根の両端を飾る棟飾りとして用いられるもので、高井田廃寺（大阪府柏原市）から出土したものに似ています。まだ誰にも知られていない古代寺院が近くに眠っているかもしれません。

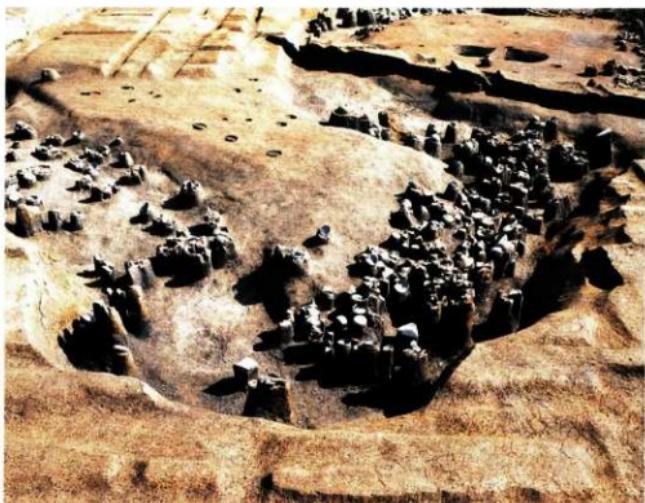
## 第2次調査(平成14年度)おもな調査のようす

遺構 旧河道、流路跡、掘立柱建物跡、区画溝、井戸、土坑、素掘小溝などがみつかりました。

遺物 繩文土器、石器、須恵器、土師器、管玉、紡錘車、転用硯、石帶、黒色土器、瓦器、治平元宝(1064年に造られた中国北宋の貨銭)、寛永通宝(1636年に造られた日本の貨銭)などが出土しました。



⑨ 本調査北・南区全景 (上が北、東西・南北方向の無数の溝が素掘小溝) 丸団数字…次のページの写真番号



北区北東側の旧河道の中にある古墳時代後期(5世紀末~6世紀後半)の流路跡です。幅5~10m、深さ0.5~1mです。掘立柱建物群の北東側を南東から北西方向へ流れていきました。因みに、⑨の写真の斜め方向の溝は掘立柱建物群を区切る区画溝で、出土する土器は流路跡とほぼ同じ時期のものです。

⑩ 流路跡から出土した大量の土器



⑪ 平安時代の掘立柱建物跡  
(人の立っているところが柱の位置)



⑫ 井戸の中の土器のようす  
(手前は井戸枠跡、奥は円筒容器跡)

掘立柱跡は多数みつかりましたが、そのうち建物として現在確認されたものは30棟ほどです。⑨の写真で斜め方向のものが古墳時代後期~奈良時代の、東西南北に沿うものが平安時代の建物跡と思われます。⑪の写真は最も大きな建物です。

井戸は水を得るために生活に欠かせないものです。この四角い井戸からは10世紀中頃の黒色土器という黒いお椀などが出土しました。いつまで集落が続いたのかという時期を決めるうえで特に注目されます。



⑪ 縄文時代晩期の土器（浅鉢のかけら）



⑫ 弥生時代の石剣



⑬ 香芝市立鎌田小学校発掘体験（2002.7.17）



⑭ 現地説明会（2002.11.15～16）

## まとめ

13年度調査では5世紀末に築かれた古墳や古墳時代から平安時代の旧河道、飛鳥時代から奈良時代の堰を設けた水路などがみつかりました。香芝市初の形象埴輪や7世紀後半頃の軒瓦・鶴尾片が出土していることから、まだ近くには第2、第3の古墳や謎の古代寺院が眠っていることが考えられます。

14年度調査では古墳時代後期から平安時代にかけて集落があったことがわかりました。掘立柱建物群や区画溝、流路跡は、下田東古墳と同じ古墳時代後期のもので、住居（集落）と墓地（古墳）の区域をみつけたことは、同時代の土地利用を明らかにできた点で貴重な成果と言えます。なお、平安時代の集落については、建物跡の規模、南北から当時の役人が身に付けた石帶（腰ベルト飾り）が出土していることから、一般的の集落ではなく、地方の役所であったかもしれません。そのほか、北区北東側の旧河道からは、縄文時代前期から晩期、弥生時代前期にかけての土器や石器などが出土したことが特筆されます。

15年度以降も引き続き発掘調査を行いますので、新しい発見が期待されます。

（調査担当 佐藤良二、湯本整、金松誠、波多野篤、巽義夫）

発行年月日

2003(平成15)年3月31日

事業機関

香芝市都市整備部区画整理課

調査機関・編集・発行

香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館

印刷

明新印刷株式会社